WEBRONZA

「年末は第九！」の理由

中東生

2013年12月16日

ソーシャルリンクをとばして、このページの本文エリアへ

２０１３年も残すところあと数週間だ。音楽界ではワーグナーとヴェルディという、大物作曲家２人の生誕２００年が祝われ続けた１年だった。

しかし、日本人にとって、彼らよりもっと身近な作曲家がもうすぐ誕生日を迎える。来る１２月１６日はルードヴィッヒ・ファン・ベートーヴェンの２４３歳の誕生日だ。そして、日本では、図らずも彼の誕生月がベートーヴェン月間だ。至る所でベートーヴェンの交響曲第九番の演奏会が開かれる。

ボンのベートーヴェンホール前に佇むベートーヴェンのオブジェ」＝ベートーヴェン音楽祭提供

年末にこれだけ多くの「第九」演奏会が催されるのは日本だけの風潮だ。その起源としては、「第九」の精神に相応しいエピソードが並ぶ。

１９１８年徳島県坂東市（現在の鳴門市）のドイツ兵捕虜収容所で、捕虜達によって演奏された「第九」が本邦初演という。収容所長松江大佐は、「武士の情け」を心情とし、敵国の捕虜に対しても「祖国のために堂々と精一杯戦った勇士」としての礼節を尽くし、人道的共感をもって接していたという。これこそ、シラーの人間愛を謳う詩に感銘を受けたベートーヴェンの世界平和への讃歌にふさわしい精神といえよう。

その「第九」が年末に演奏されるようになったのは、１９４３年東京音楽学校（現東京芸術大学音楽学部）の奏楽堂で行われた、学徒壮行音楽会に起因していると言われる。太平洋戦争の状況悪化で法文系学生にも徴兵令がくだるようになり、卒業式を１２月に繰り上げ、「第九」の第四楽章で卒業と出征を祝った。そして戦後もまた、生き残った者達が帰らぬ友へのレクイエムとして、別れと同じ１２月に「第九」を演奏し、「第九＝１２月」の図式

が出来上がったという。

そのうち、当時貧しかったオーケストラが、１２月に「第九」を持って地方を回るようになった。この曲は知名度が高い上、合唱団員の知り合いを通してチケットが売り切れやすい。学生などにコーラスを頼むと出演料も安く抑えられ、収益を年末のボーナスとして還元できたという。こうして現在まで、年末の「第九」ラッシュは伝統として続いているのである。

それではヨーロッパはどうであろうか。実は１８２４年５月７日の初演での成功を除き　、後続の演奏会は全て失敗に終わっていた。その要因として「突然合唱と４人のソリストが登場する第４楽章が、その前の楽章に比べて異質」であるからとされ、しばらくは省かれて演奏されていた。ベートーヴェン自身も、第４楽章を器楽のみの編成に書き直す計画すら立てていたという。しかしこの全曲が内包するパワーに確信を持っていたワーグナーが、全楽章を復活演奏して、傑作として世に知らしめたのである。

ベートーヴェンが後半生を過ごしたウィーンにある楽友協会ホール＝Austrian National Tourist Office 提供

現在ドイツでは、「第九」は祝祭時に演奏される曲として一般に認知されている。また第四楽章「歓喜の歌」の主題は EU の歌として採択されてもいる。ベートーヴェンの故郷ボンのベートーヴェン音楽祭に、日本の「第九」熱について投げかけると、次のような好意的なコメントが寄せられた。

「私達のベートーヴェンオーケストラは、『ベートーヴェンの夕べ』で一年を締めくくりますが、第九に限らず毎年様々な作品が取り上げられます。日本でもベートーヴェンの作品が好まれ、そしてとりわけ年末に第九が人気だということは私達も聞いて知っています。若者も含めた数百名の日本人が第九を演奏している映像に出会ったこともあります。それは素晴らしい事だと思います。そういう活動を通してベートーヴェンの音楽が世界中に響き渡るのですから。ベートーヴェンの作品は常にコスモポリタン的で、幻想的で、革命的です。しかし特に交響曲第九番で彼は、音楽的ユートピアを実現させ、『人類はいつの日か、喜びを通して一つになれる』という希望を表現し得たのです」

そんな「第九」の精神にふさわしい公演が２０１４年３月５日にウィーン

楽友協会ホールで開催される。

楽友協会ホール内部。この舞台の上で日本とオーストリアの歌声が結ばれる＝Austrian National Tourist Office提供

『歌う　Daiku in ウィーン』と冠されたこの企画は、「第九」の合唱経験を持つ一般人が参加でき、南相馬ジュニアコーラスアンサンブルも招待されている復興のためのプロジェクトである。収益金の一部は東日本大震災遺児等支援義援金として福島県南相馬市へ寄付される。コーラスはウィーン少年合唱団や、その卒業生が組織している合唱団と混ざり、ソリストも半分がオーストリア人、半分が日本人で構成されている。ウィーン国立歌劇場専属歌手として１０年間活躍し、帰国したばかりの甲斐栄次郎氏がバリトンパートを務める。甲斐氏にお話を伺った。

「『年末＝第九』という図式が日本で定着したのは、プロとアマチュアの境界線を越えて、共に音楽を奏でられる素晴らしい機会が一年を締めくくるのにふさわしく、また、新年へ向けての新しいエネルギーをも得られるからだと思います。この合唱パートは簡単ではありませんが、長過ぎないので、合唱の初心者でも頑張って練習すればある程度歌えるようになります。そしてそんなアマチュア合唱団と第九を共に演奏する時に、必ずといっていいほど感じることがあります。それは彼らの歌声から聞こえて来る心からの『歓び』です。その『歓び』は、歌唱技術の優越を超えて、音楽を一層きらきら輝かせるのです。ウィーンでの第九も、世界のいろいろな『懸け橋』として、恒例行事になることを願います」

今年の年末も、日本は「第九」花盛りである。前出の甲斐氏が２度目の登場となるＮ響を始め、３０年続いている大阪城ホールの「一万人の第九」や東京国際フォーラムでの参加型第九、久石譲第九スペシャルなどいろいろな形態のものがある。忙しい師走の小休止に、ベートーヴェンの描く友愛の歓喜を胸一杯に充電して、よいお年をお迎え下さい。

【Global Press】http://globalpress.or.jp/

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.